

【第14回年次大会 シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

『キャッチャー/ギャツビー/ティファニー』の「僕/私/あたし」：  
村上春樹の翻訳とジェンダー

斎藤理香

村上春樹は、翻訳をする小説家で、創作をする翻訳家でもある。ここではそんな村上の創作における「翻訳文体」の特徴を概観し、その翻訳（和訳）のジェンダー表現、特に男性一人称とその視点から語られる人物像、女性表象について考察した。村上訳の作品は、D.J.サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(2003)、スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』(2006)、トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』(2008)をとりあげた。

村上春樹の翻訳と「翻訳文体」

村上春樹の翻訳は、基本的に、英語（起点言語）の直訳的表現を日本語（目標言語）の文脈に積極的に取り込み、自然さと自明性に慣らされた日本語表現に揺さぶりをかける、起点言語志向の翻訳（または欧文脈）、いわゆる直訳的翻訳に近い。しかし同時に日本語にして「違和感を感じると思ったら、翻訳者は自分の判断で変えていいんじゃないか」（同 2000:62）という目標言語志向を意味する発言もしている。つまり、村上にとって翻訳とは、翻訳を通じて「文学的・文章的に学ぶ」（村上・柴田 2000:87）ためのもの、創作のための翻訳だと解される。

村上の小説の文体はディタッチメント（超然?離脱?）を想起すると言われ、翻訳の直訳体を媒介とした日本近代文学における変革の文体と重なるのだが、一方で彼は、日本文学が受容しなかった、三人称単数の人称詞 *he, she* をそのまま「彼、彼女」として自らの文体に取り込んでいった。村上は翻訳のコツを「エゴみたいなものを捨てること」（村上・柴田 2000:63）だと述べている。小説家としてのエゴを後方に追いやり、創作する自分を外側から眺める視点を得ることで、文体のディタッチメントが生まれ、私小説の枠には収まらない「僕」の一人称小説が書かれたのではないだろうか。このように、村上の翻訳文は、彼の創作の文体とセットでとらえることができる。

ジェンダー表現と小説の文体

日本語のジェンダー表現と創作における問題は、性差表現が過度にステレオタイプ化され、男女のイメージを固定化してしまうことにある。英語から日本語に翻訳された小説では、さらに性差表現が増幅する可能性が高くなる。英語の *I* や *she* や *he* が、日本語では頻出しない人称詞、「私」「僕」「彼女」「彼」と訳出されることがある一方で、日本語文では特に言わなくてもいい「私」や「彼」の代わりに、会話部分に文末詞の性差表現が余分に持ち込まれることがあるためだ。日本語とジェンダーの実証的研究によって、実際は必ずしも女性が「女性らしく」男性が「男性らしい」言葉遣いをするわけではないことがわかっているが、それは金水敏（2003）によれば「役割語」としてフィクションの世界に登場するのである。こういうステレオタイプ化という現象に加え、ステレオタイプを補強する社会的規範が作用している可能性があることも重要である。

以上のような翻訳、文体、ジェンダー（性差）表現についての論点をふまえ、村上春樹の翻訳作品の「僕」一人称の語り、また登場人物のセリフの一人称を文例を交えながら考察した。

（さいとう りか・ウェスタン ミシガン大学 准教授）